

Title	ジル・モラ著前川・小林・佐藤・青山監訳『写真のキーワード：技術・表現・歴史』昭和堂 2001年
Author(s)	市川, 靖史
Citation	デザイン理論. 40 P.107-P.108
Issue Date	2001-11-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52732
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ジル・モラ著 前川・小林・佐藤・青山監訳
『写真のキーワード——技術・表現・歴史——』

昭和堂 2001年

市川靖史／京都工芸繊維大学

本書はタイトル通り、写真に関わる用語の解説集である。著者のジル・モラは多くの写真批評や解説を執筆するほか、フランスの写真批評誌『カイエ・ド・ラ・フォトグラフィ』の編集長や、国際的に有名な「アルル国際写真フェスティバル」のアート・ディレクターを務めた経歴を持つ。原著としては仏語版の他に、英語版も先行して出版されているようで、英語版のタイトルは『photo SPEAK: A Guide to the Ideas, Movements and Techniques of Photography, 1839 to the Present』(1998)という。つまり、写真術発明の年とされる1939年から今日に至るまで、写真にまつわる理念、運動、技術の動向と変遷を知る上で重要なタームを取りあげて、解説するという体裁をとっている。取りあげられているキーワードは125項目であり、そのほかに、写真史年表、人名及び事項のインデックスが付されている。

本書の特色は、この、項目の選択のしかたに現れている。具体的に挙げてみると、「イキヴァレント」、「象徴主義」など、表現上の理念に関わるもの、「グループF/64」、「ニュー・トポグラフィックス」、「ピクトリアリズム」など、理念に基づいた動向に関わるもの、「記号学」、「身体」など、解釈、批評に関わるもの、『映画と写真』展、「農業保障局」など、歴史上のトピックに関わるもの、「印画紙」、「カメラ」、「乳剤」などの技術的用語、「アプロプリエーション」、「フォトジェニック・ドローイング」、「フォトモンタージュ」などの技法、「科学写真」、「広告

写真」、「司法写真」、「写真エージェンシー」など、写真の利用と分類に関わるものなど、その選択は多様な範囲に及んでいることがわかる。しかし本書にひと通り目を通せば、これが単なる用語解説集として企画されたものではないことがわかる。というよりは、その多様性は、写真というメディアの特性を反映させた結果なのであろう。

まず、写真というメディアは、視覚表現の媒体として用いられてきた一方で、常にその他のさまざまな目的で使用されてきたという事情がある。また、写真術は光学、化学及び工学技術の前提の上に初めて成立するものであり、各時代における写真のありようは、常にこうした技術的属性の発展と密接に関わり合っている。言い換えれば、写真表現史、写真受容史、写真技術史といった3本の軸の発展と相互影響の総体として、写真世界の拡がりを捉える、という想定が可能であるということも出来よう。

先に見たように、本書でモラが取りあげたキーワードがバラエティに富んでいるのは、このように写真を巨視的に捉えた上で、互いの関係性の中に各項目を位置づけ、解説しようとするもくろみの現れであると言えるだろう。

例えば印画の技術に関する項目を見てみると、「アルビュメン・プリント（鶏卵紙）」、「アンプロタイプ」、「ウッドブリータイプ」、「カーボン印画法」、「カロタイプ（タルボタイプ）」、「ゴム印画法」、「コロディオソ法」、「ゼラチン・シルバー法」、「ソルテッド・ペーパー・プロセス」、「ダイ・トランファー法」、

「ダゲレオタイプ」、「ティンタイプ」、「プラチナ・プリント」、「ポラロイド」などの技法が取り上げられている。これらの項目を読むと、写真の初期から現在まで、実に多くの技法が次々と開発されて（また、その多くは衰退して）きたことがわかる。しかし、モラはこうした諸項目において、技術的な側面のみを解説するのではなく、あわせてそれぞれの技法と関係の深い表現の動向についても言及している。そのおかげで、ゴム印画法の制作プロセスや階調表現がピクトリアリズムの実践に不可欠であったことや、プラチナ・プリントを好んで用いた作家は誰か、といった、より広いコンテキストとの関連において各事項を理解する事が出来るのである。

また、「シュルレアリスム」、「バウハウス」、「ポストモダニズム」、「未来派と写真」など、芸術やデザインを含むより広い動向についての項目では、その理念や実践との関連において写真が果たした役割、また写真的見地からの批評的言説なども紹介されており、写真を専門とする研究者でなくても興味深く読むことが出来るだろう。

このように本書は、広範な事項を扱ったキーワード集でありながら、それぞれが互いに関連づけられ、書物としてひとつの秩序を構成しているところに特色がある。この特色は、複数の執筆者の共著ではなく、ひとりの著者（ひとつの視座）によって書かれたことに起因していることは言うまでもない。

この日本語版の翻訳を行ったのは、関西を中心にした研究者によって運営されている「写真研究会」のメンバーである。訳文は語彙の選択や統一もよく吟味されており、また、上に述べたような原著の持つ、言説の一貫性を保つように、よく配慮がなされている。また、解説と共になるべく多くのイメージが参

照できるように、原著にはなかった、新たな図版も掲載されているという。巻末に付けられた詳細なインデックスから「逆引き」といった利用法も、もちろん有用である。